

マルク・ボーン著

ブルゴーニュ公国史研究会訳

## 『中世末期ネーデルラントの都市社会』

——近代市民性の史的探求——

(叢書ベリタス)

八朔社 二〇一三・一二刊

四六 三二二頁 二八〇〇円

本書は、マルク・ボーンのブリュッセル自由大学における二〇〇六年～二〇〇七年度の連続講義の内容に基づくものである。著者のボーンは現在ベルギー・ヘント大学の文哲学部長を務めており、同大学の中世史研究室を中心としたベルギーの中世史学界を長らく牽引し続けている。本書において著者は、序章を除く全五章の各テーマを通じ、近代国家形成以前のネーデルラントの地域的統一性の萌芽を中世末期の都市社会に求め、その妥当性を政治・経済、文化といった各領域から検討している。

序章「中世の秋」では、前近代のネーデルラントの統一性をめぐる史学史的展開が、主に二〇世紀前半における、アンリ・ピレンヌとヨハン・ホイジンガの対比を軸として整理される。

第一章「前近代のネーデルラントに民主主義はあったか」では、ピレンヌ以降、商業的自由と集権化の阻害者としてネガティブに評価されてきた中世末期の同職組合の、都市内における役割が再評価される。同職組合による都市政治の統制は、寡頭制的ではあ

るが、都市の公共善や共同利益を擁護する役割を担うようになる。この点で、同職組合は都市アイデンティティ形成の中核に存在していたのである。

第二章「ネーデルラントにおける都市騒擾の伝統」では、中世末期に頻発する都市騒擾を、当地に特有な政治文化形成の主要因として解釈する。一四世紀フランドルの騒擾の経験は都市社会の中で集合的暴力の制度化を促した。同世紀以降、騒擾は上位権力に対する儀礼化した都市の権利要求の形式として確立するのである。

第三章「社会的統制、行動の統制」では、諸権力による市民の社会生活の統制のあり様が、法制史と社会史の観点から論じられる。特に社会史における近年の研究成果が提示され、その中心は、都市における男色の抑圧という題材に置かれている。

第四章「都市風景の権力と解説」では、中世都市の伝統的比較対象であるフランドルとイタリアの都市社会が、都市空間に関わる近年の知見に基づいて再度比較される。中世を通じ都市国家の形成に至るイタリア都市に対し、君主国家に組み込まれてゆくフランドル都市においては、君主権力による都市空間や都市の記憶への様々な介入が行われるのである。

第五章「都市社会とブルゴーニュ国家の形成」では、ブルゴーニュ国家の集権化の時代における、君主権力の拡大の実態が問題とされる。君主と都市の自立主義との単純な対立の中に集権化は還元されるものでなく、税制、司法の面で在地の諸制度が積極的に活用されていたのである。

以上、本書は、中世末期から近世を貫くネーデルラントの政治文化が都市社会の中から生み出されたことを広範な観点から明らかにしているが、表題の「近代市民性」との関連については、著者による「近代性」の定義が明確に提示されていないためか不明瞭にも思われる。しかしながら、本書は、当地域のみならず西欧中世都市社会史研究の諸問題と最新の研究状況を知る上で非常に有益な書であるといえるだろう。

(池野 健)